

保育内容・表現の授業実践に関する一考察

A study for class practice in childcare contents expression

永井 夕起子*

(令和2年11月4日受理)

要約

保育者養成課程では、子どもたちの発達に寄り添い保育する力を身につけるため、保育内容の領域が相互に関わり合った総合的な指導法を学ぶことが求められている。本研究においては領域横断的な指導法の一案を提起することと、科目内容のさらなる改善を目的とし、本学保育科2年生を対象とする「保育内容・表現A」科目で行う、物語の文章にオリジナルリズムを付けたり、ダンスを振付けたりして楽しむ活動の展開についてまとめた。活動内容を振り返ることで展開方法についてさらなる広がりが見込める。

キーワード：動き、リズム、言葉

keywords：movement, rhythm, word

1. はじめに

平成元年以降、保育内容は「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域で構成されている。領域「表現」の前身は「音楽リズム」と「絵画制作」とに分けられていたが、子どもの自然で自由な表現方法を認め育むことを重視するため、その区分は取り除かれることとなった。本学の保育内容・表現はAとBの2科目があり、それぞれを体育専門の教員と音楽専門の教員とが担当し、各々の専門性を活かしつつ、音楽、造形、身体(体育)といった表現分野を跨ぐいわゆる総合的な表現方法や指導法を扱っている。

加えて近年では、領域横断的な指導法の重要性も唱えられ、領域をまたぐ複数の教員が担当する科目を設置する教育機関も増えている。現在筆者が担当する保育内容・表現Aにおいても、表現分野の統合だけでなく、領域横断的な活動を取り入れる工夫をしている。

そこで本研究では、「保育内容・表現A」で実施した、領域「言葉」との結びつきを考慮した授業実践についてまとめ、授業内容の改善と領域横断的な活動の可能性について考察することとした。

2. 授業の実践報告

2-1. 授業の目的

対象は「保育内容・表現A」全15回中の第7回目である(表1)。全15回中の前半は主に身体で表現する技術の習得、中盤では現場を想定した活動を実践し、終盤で自ら計画を立て実践する流れとなっており、現場での道具やトピックを扱う活動のひとつとして行う授業に位置付けられている。

自分が考えた文章にリズムや音程を付けて音楽的に読み、振付けし発表するまでを1回の授業内で実施した。

2-2. 受講者

本学保育科2年生の科目履修者。1クラスずつの演習科目で、24~27名で構成されている。

(*ながいゆきこ 保育科准教授 身体表現)

表1. 2018年度 保育内容・表現Aの授業計画

回	テーマ
1	オリエンテーション
2	こころと身体の結びつきを感じる
3	基本的なステップの理解
4	基本的なステップの展開
5	リズム遊び
6	リズム遊びの展開
7	言葉とリズムの遊び
8	楽器を使った表現遊び
9	身近な素材を使った表現遊び①
10	身近な素材を使った表現遊び②
11	影絵遊びとデジタル機器を利用した表現遊び
12	発表会の計画
13	発表会の準備
14	発表会（模擬保育）
15	学習の振り返り

2-3. 導入部の活動

2-3-1. 手拍子リズム遊び

最初は真似っこリズム遊びで簡単なリズム作りをした。まず、教員が手拍子と声でリズムを提示し、クラスの学生が真似をした。数回繰り返して要領を確認したのち、近くにいる学生同士で4～6人のグループを作り、先にリズムを提示する教員役（1人）と残りのグループメンバーとが向き合い、手拍子のリズム真似っこをした。全員に教員役が回るまで繰り返した。

2-3-2. 擬音語リズム遊び

次に、声で示すリズムを「タン」「パン」「ドン」などの打つ音の擬音語から、さらにバリエーションを広げた「びよんぴよん」「ぐるぐる」「シュツ」「きゅきゅ」などの自由な擬音語のフレーズを作り、動きも音に合わせて手拍子から足踏み、全身を打つボディパーカッション、さらに回転やジャンプも含む全身の自由な動きへと発展させた。自分なりにひとまとまりの動きとそれに合わせたオ

ノマトペを作り、4～5人のグループ内でまねっこ遊びの要領で発表して遊んだ。これも全員が先に提示する保育者役を体験するまで繰り返した。

2-4. 展開部の活動

2-4-1. 文章や名詞を使ったリズム遊び

オノマトペの音に合わせた全身の動きをつかった真似っこ遊びを十分に楽しんだあと、意味が含まれる短い文章、や名詞を連ねたフレーズを作り音楽的に読む作業の展開へと進んだ。何気ない今の気持ちや、好きな食べ物やアイドルの名前などを、標語や俳句程度の文字数にまとめるように指示した。自分で作った文章には、真似っこリズム遊びのように、オリジナルのリズムや音程を付けるよう指示した。文章の読み方はスタッカートやスラーなどの音楽記号や自身のオリジナルの記譜を入れてプリントに書き込むように指示した。さらに言葉のフレーズにあわせて動きを付けた。言葉の意味と動きを結びつける必要はないことを伝え、言葉のリズムを軸に動きを振付けるようにした。プリントには、①言葉のフレーズ、②読み方（オリジナルの記譜を用いて）、③動きを記録した(図1)。2つの作品が完成したらすぐにグループ内でリズム遊びの要領で発表し、感想を伝え合った。

2-5. グループごとのクラス発表

クラスに向けた発表では、互いの発想の違いに触れ、受け入れ合う過程が体験できるよう、岡田陽・清水俊夫監修『ことばあそび』にある、リズムミカルな「オオカミと子りす」の話から好きなフレーズを2つ選び、グループで読み方、動き方を考えて発表することとした。個人の文章を歌にして踊った後のため、あらかじめリズムに乗せやすい文体にオリジナルリズムを付けるという作業は早々にできた。振付けは全員が同じ動きするだけでなく、オオカミ役と子りす役に分かれたり、全員で森の様子を表現したりと役割分担や群舞のような動きが自然と行われていた。他のグループの発表を鑑賞している最中に、自然と「面白い!」「かわいい!」と褒め合う言葉も掛け合うように

図で示そう!

動き

言葉

動き

言葉

上段：風がビュービューふいている
下段：星がきらきら かがやくよ

図で示そう!

動き

言葉

動き

言葉

上段：バスケ ダムダム はい シュート
下段：お祭りどんちゃん それぞれ

図で示そう!

動き

言葉

動き

言葉

上段：ぐんぐん大きくなってきれいな花が咲きました
下段：ちょうちょうがヒラヒラとんできた

図で示そう!

動き

言葉

動き

言葉

上段：雨がざーざーふってきた
下段：しずくがぽとと葉っぱから落ちた

図1. 文章や名詞を使ったリズム遊びで学生が書いた記録内容

表2. 第7回目授業の流れ

時間	課題	活動内容
10	手拍子リズム遊び	手拍子でリズムを真似る 3～4人組をつくる。1人が先生役になりリズムを作り手拍子を叩いた後、メンバーが真似をする。全員が先生役をやる。
15	擬音語リズム遊び	手拍子で使った「タン、タ」以外の擬音語のフレーズを作り、擬音語に合わせて自由に動く。先生役と子ども役に分かれて行く。
15	文章や名詞を使ったリズム遊び	短い文を作り、それをリズム遊びのように音楽的に読み(歌う)、そのリズムに合わせて自由に振りをつけて踊る。グループ内でまねっこ遊びの要領で発表する。
40	リズムカルなお話にオリジナルの読みと振りをつけて発表する	「オオカミと子りす」を自分たちオリジナルの音楽的読み(歌い)方を決め、振りをつけて踊る。(「オオカミと子りす」岡田陽・清水俊夫監修『ことばあそび』より)

なり、発表者は発表することを楽しみ、達成感を味わっているようであった。

3. 活動を振り返って

3-1. 導入部について

導入部では、保育科の学生の多くがこれまでも体験したことのある、真似っこリズム遊びの手拍子を取り入れた。手拍子の時に「タン」、「パン」と口でしっかり発声できていると次の擬音語も伝わりやすく、楽しみやすくなるため、経験したことのある簡単なリズム遊びの中で、リズムの提示役を全員がしっかり体験できるようにした。

擬音語のリズム遊びは全体の活動を切り替える前から、自然にできてきているグループあった。そのことを通じ、クラスの雰囲気や流れによっては手拍子の音にこだわらず、始めから自由な擬音語に挑戦することも可能と考えた。

3-2. 展開部について

名詞や文章を使うことについて、イメージしづらい学生も複数いたようであった。事前に様々な例文、フレーズをお手本として示すと、さらにバラエティ豊かな内容になったと思われる。次年度の取り組みでは、今年度の様子を動画で示しイメージしやすいよう進めていきたい。また、自己紹介のようなある程度の括りを設けて文章を作るという課題に取り組んだ後、自由な文章を作成するという一段階を設けて、作業する必要があると思われた。

3-3. 発表について

発表では、全員が同じふりをするだけでなく、群舞のようにひとつのものを表現する場面が見られ、個人の動きでは感じられない一体感も生まれていたように思われる。また、オオカミ役と子リス役とに分かれた表現もあり、短編劇的な構成が現れていたのもグループ創作であってこその特徴



「オオカミ もりのなか」



「こりすがくるみを食べている」



「木の裏に」



「目ばかりひからせる」

図2. 「オオカミと子リス」発表の様子

であった(図2)。今回は道具を一切使わずに発表した。創作時間にゆとり持たせ小道具も取り入れて発表する展開も期待できる。

また、自由に作成した文章の作品にもユニークな作品がいくつも見られたので、グループ内発表だけでなく、希望者のみでもクラス全体に発表する時間を設けられたら良かったと感じている。

今回は、リズムカルに読むお話「オオカミと子リス」から文章を引用して作品づくりをしたが、今後は自分の好きな絵本の文章を利用して歌を作って踊ることにも発展させていきたい。

4. まとめ

既存の歌に合わせて踊ることは、子どもたちの表現力や言葉への理解と関心を広げる貴重な機会である。今回報告した活動では既存の歌でなく、自分なりの言葉の並びや音を楽しむことを取り入れた。

文章や言葉のフレーズを考える作業は、身体を動かすことに苦手意識を抱いている学生でも、すんなり着手できているように見受けられた。授業15回中の前半で体を動かすことを中心とした内容に取り組んできたなか、活動内容が身体からの少し離れ、言葉や文章を作る作業とした分、思考する側面が広がり、その結果動きを考え出す幅も広がったように見受けられた。領域横断的な活動を取り入れることは、授業の進行上にも多様な広がりをもたらすだけでなく、学生一人ひとりの技能や興味関心について、新たな側面が発見できたように感じられた。今後も様々な表現分野や領域をまたぎ、新しい視点で表現方法を捉えられるような、柔軟性の高い授業を探求したい。

5. 参考文献

- 1) 岡田陽・清水俊夫監修『ことばあそび』1981
玉川大学出版部

